

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 絵画にも 西洋的なものと日本的なものでは根本的なちがひがあると思います。

西洋の油絵と日本の墨絵を比べると、そのちがひは明らか。

油絵は、デッサンをしてきちんと構図を決め、そこに絵の具を載せていきます。絵の具は何度でも塗り重ねられる。作者は納得するまで絵の具を重ね、「これでよし」というときに絵画は完成するわけです。

一方、墨絵の場合、実際に紙に筆を置いてから描き上げるまでの時間はごく短いものです。といって、「描く」のに時間がかかっているわけではない。時間をかけて墨をすりながら、描きたいテーマや構図、*1筆致などを自分の頭のなかで練りに練るからです。そして、ひとたび筆を執つたら、ほとんど一気に描き上げる。

描き出されるのは、そのとき、その瞬間の自分自身です。わかりにくい言い方かもしれませんが、「すべての自分がそこに投入されている」のです。2 露わな自分^あが墨絵として表現されている、といつてもいいでしょう。

ですから、絵柄も、構図も、墨の濃淡も、そのときかぎりのもので、一度と同じものが描かれることはありません。A、そのとき、その瞬間の自分は、次の瞬間には移ろい、変化しているからです。油絵のように筆を何度も入れ直して作品を完成させるということもない。

もちろん、時間をかけて描かれる複雑な構図や細密な絵柄の作品もありますが、基本的な姿勢は同じです。風景でも人物でも、その一つ一つの筆運びは、後戻りできないその瞬間の、自分まるごとの投入、投影なのです。

禅の研究者で、禅文化を広く海外に広めた鈴木大拙^{だいせつ}さんの言葉にこんなものがあります。

「生命は、時という画布の上に、みずからを描く。そして、時は、けつしてくりかえさない。ひとたび過ぎゆけば、永遠に過ぎ去る。行為もまた同様である。ひとたびおこなえば、おこなわれる以前にはけつして戻らない。3 生命は『墨絵』である。ためらふことなく、知性を働かせることなく、ただ一度かぎりで描かねばならぬ」

生命に重ね合わせることで、墨絵の何たるかを、4 その本質^{ほんしつ}を射貫いた^{とら} *2 至言^{しごん}でしょう。

墨絵は、いうまでもなく、墨の濃淡だけで描かれ、色彩はありません。

しかし、次のような表現があるのを知っていますか。

「墨に五彩あり」

五彩とはたくさんの色ということです。B、墨は、その濃淡で無限大に広がる「色」を描くことができる、というのです。もつとえば、「絵の具をもつてしてもあらわせない色でも表現できるのが墨だ」ということでしょう。

5 色を感じとるのは、見る人の想像力^{さうぞうりき}です。よく知られている禅画に、六つの柿が墨で描かれたものがあります。六つの柿の一つひとつの風合いがちがっている。どの柿がどのくらい熟れているのか、C、まだ、熟していないのかが、墨一色のその絵で、みごとに見る人の心に届くのです。

もちろん、色彩を使えば、もつと直接的に描き分けられるでしょう。D、それでは想像力を喚起^{くわんき}しない。赤く彩色されていれば、「熟れているな」と感じるでしょうし、緑がかつた色なら、「まだ、熟していない」という感じ方を誰もが同じようにするわけです。

ところが、墨の濃淡だけで描かれた柿は、見る人ごとにちがった色を感じさせます。ある人が美しい橙^{だいだい}色を見たひとつの柿に、別の人は赤を見るかもしれませんし、緑を感じるかもしれないのです。

さらに、橙^{だいだい}色も人それぞれで、淡い橙^{だいだい}色であつたり、深みのあるそれだつたりするわけです。まさに、一色の墨が無数の色を伝えるのです。

こんな奇跡のようなことを、当たり前にしてきたのが、禅の心、日本の心なのです。

「見る人の想像力にゆだねられる部分をあえて残す」というのも日本文化の特徴といえるでしょう。しかし、実はこれは、恐^{おそ}い文化でもあります。なぜなら、言葉を換えれば、見る人の力量が問われるということにはかなりませんかから……。

書になると、いつそうそのことがはつきりします。

禅では書のことを「墨跡^{ぼくせき}」といいます。そこにあらわれているのは、書かれた文字だけではありません。目には見えない作者の空間的な筆の動きも、その文字からは伝わってきます。

どのような筆の動きで、ひとつの「点」が打たれるのか、「はらい」や「はね」が書かれたのか、見る人は想像力をはたらかせます。また、6 何も書かれていない目の部分も墨跡の一部です。そうしたものを7 一切合切^{いっせがっけつ}を含めて「墨跡」という作品は成立しているのです。

見えないものまで見ていく。日本文化のアプローチとして欠かせないのがその心がまえです。

花は、洋の東西を問わず、人びとに愛されています。自分自身が愛でるためだけではなく、友人や知人、大切な人を招くときにも、花はおもてなしの心を表現する重要な存在といえるでしょう。リビングやダイニングのテーブルに、花が飾られているかないかで、印象はずいぶんちがったものになります。

空間に、文字どおり、「I ぎかさ」を添え、空気を和ませる。花にはそんな力がありますし、訪れた人に「ようこそいらっしゃいました。お待ちしておりますよ」という無言のメッセージを伝えます。

しかし、8 花の美しさに対する感覚は、東西ではつきりちがひがあるように思えます。それは、花の飾り方に大きく差があることからわかります。

西洋の花の飾り方、いわゆるフラワーアレンジメントは、ボリューム感と色彩に重きが置かれています。何種類もの花があしらわれ、色もとりどり、量もたつぷりで、見るものを圧倒するほどです。「わあ、私のためにこんなにたくさんの花を用意してくださつて！」。おそらく、そんな反応が返ってくる。

一方で、日本の花のいけ方は、*3 趣^{おもむき}がまつたくちがひがあります。季節の花がさりげなくいけてある。数もかぎられ、梅^{うめ} I、むくげ^{むくげ} II、椿^{つばき} II、といつたことが少なくありません。画家・美食家・料理人として知られる北大路魯山人^{きたろじん}にいたつては、枯れ枝を一本挿^さただけで、客をうならせたことがあるほどです。日本のいけはなにおいて、その花があらわしているのは「心」、もつとえば「おもてなしの心」なのです。

訪れる人を精^{せい}いっぱい花でおもてなしするには、季節を考える必要があるでしょう。さらに、その日の天候や時間帯^{ときりよ}を考慮^{こうりょ}する必要があるかもしれません。

夏の真つ盛りの晴れた暑い日に昼食にお迎えするのでしたら、「涼やかさ」がもつとも重要。そこで、見た目にも涼しさを感じさせる青い朝顔を「**II**」押しに押ししたり、むくげの一枚を飾って霧を吹いたり……といったいけ方をします。なんとというさりげなさでしょうか。

このとき、見る人も、「わあ、涼しそう！」といった***4**直截的な反応は、通常、しません。心の内で思いを受け取り、和やかな表情で感謝の気持ちを伝えるのです。**III**のコミュニケーションがそこに成立しています。

日本人にとって、花は「命」あるものです。ですから、その大切な命におもてなしの心を載せることに心を砕きます。一方、西洋人にとって花は「素材」ですから、***5**ふんだんに使うことに意味を見出すのではないかと私は思います。

この***6**彼我の差、あなたはとう受け取りますか。

(研野俊明『日本人はなぜ美しいのか』 幻冬舎新書より)

- *1 筆致：文字・文章・絵画などの書きぶり
- *2 至言：ある事柄をこの上なく適切に言い表した言葉
- *3 趣：意味。伝えたい事柄。ようす
- *4 直截：まわりくどくなく、きつぱりしていること
- *5 ふんだん：多くあるさま
- *6 彼我：相手と自分

問一 空欄 **A** と **D** にあてはめるのに最もふさわしいものを、次のア～キの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい

- ア あるいは
- イ なせなら
- ウ しかし
- エ さらに
- オ つまり
- カ そこで
- キ そして

問二 部1「絵画にも、西洋的なものと日本的なものでは根本的ながいがある」とありますが、そのながいについてよく分かるように、次の説明の文章の【 】部ア・イに入れるのにふさわしい言葉を、本文中の語句を用いながらそれぞれ七字以内で答えなさい。

筆を使つて描くのに、西洋の場合は【 ア 】が、日本の場合は【 イ 】に描くというながいがある。

問三 部2「**霧**な自分」とあるが、その説明としてふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ありのままの自分
- イ 隠してのない自分
- ウ 決して変わることはない自分
- エ 過去や未来と切り離された自分

問四 部3「生命は『墨絵』である」のような表現を何とといいますか。最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 暗喩(隠喩)
- イ 明喩(直喩)
- ウ 擬人法
- エ 倒置法

問五 部4「その本質」とありますが、それはどのようなことですか。本文中の語句を用いて、二〇字以上三〇字以内で説明しなさい。

問六 部5「色を感じとるのは、見る人の想像力です」とありますが、別の言葉で言い換えるとどのようなことですか。本文中の語句を用いて、二〇字以上三〇字以内で説明しなさい。

問七 部6「何も書かれていない白の部分も墨跡の一部です」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 空白の部分をあえて残すことで、墨の持つ美しさがいつそう引き立てられるから。
- イ 何も書かれていない部分から、作者の筆づかいを理解することができるから。
- ウ 空白部分があることにより、作者が想像力を無限に働かせることができるから。
- エ できる限り墨を使わずに書を書きあげることこそ、日本文化の特徴であるから。

問八 部7「一切合切」とほぼ同じ意味となる語が、1ページの本文中にはひらがなで二つあります。それぞれ四字以内で抜き出して答えなさい。

問九 部8「花の美しさに対する感覚は、東西ではつきりながいがあるように思います」とありますが、具体的にはどのようなながいがありますか。次の説明の文章の【 】部ア～エに当てはめるのに最もふさわしい語を本文中から抜き出して答えなさい。ただし、ア～ウは二字以内、エは五字以内で答えること。

花の美しさを感じるのに、西洋では【 ア 】と【 イ 】を重視するのに対し、日本では【 ウ 】と【 エ 】を重視するというながいがある。

問十 空欄 **I** に当てはめるのに最もふさわしいことばをひらがな二字で答えなさい。

問十一 空欄 **II** には花を教えるときに用いる共通の語が入る。それを漢字一字で答えなさい。

問十二 空欄 **III** には「〇心◇心」という四字熟語が入る。〇と◇の部分にそれぞれ適切な漢字を補い、四字熟語を完成させて答えなさい。

二 次の語句や言葉に関するそれぞれの設問に答えなさい。

A 漢字に関する問題

問一 次の――線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- ① 運動するときは、水分をオギナおう。
- ② 国同士の争いがようやくオサまる。
- ③ 夏は食物がイタみやすいで、気を付けよう。
- ④ 入試の前日は験をカツいで、とんかつを食べる。
- ⑤ 学芸会の主役をツトめる。

問二 次の――線部の漢字の読みがなをひらがなで答えなさい。

- ① 父の体力が漸しくおとろえる。
- ② 近くの神社へ行行って、ご本尊を拜む。
- ③ 兄は危うくけがをすところだった。
- ④ 援助を否むわけにもいかない。
- ⑤ 今年の冬は北海道を訶れる予定だ。

B ことわざ・慣用句に関する問題

問三 次の口に当てはまる言葉をいれて慣用句を完成させなさい。また、その意味も答えなさい。(ただし、言葉と意味はあとの語群からそれぞれ選び、記号で答えること。語群1《言葉》は解答欄の(1)に、語群2《意味》は解答欄の(2)に答えること。)

- ① 腰を〔 〕
- ② 手を〔 〕
- ③ 腹を〔 〕
- ④ 口を〔 〕
- ⑤ 爪に火を〔 〕

語群1 《言葉》	ア くくる	イ 曲げる	ウ ともす	エ つける	オ かける	カ 打つ
	キ 出す	ク 引く	ケ 利く	コ 焼く	サ 折る	シ かむ
語群2 《意味》	A 間に立って取り持つこと		B 大変節約すること		C 途中でじやますること	
	D 覚悟を決めること		E 面倒を見きれず、もてあますこと			

C 文法・言葉遣いに関する問題

問四 次の――線部を正しい敬語表現に直しなさい。

- ① 今から先生の家にお邪魔してもよいですか。
- ② 旅行に関する件は、受付で引かがつて下さい。
- ③ 明日校長先生がこちらに来る予定になっています。
- ④ お土産は、家族全員でおいしく召し上がりました。
- ⑤ お客様、AランチとBランチのどちらにしますか。